

伊東俊太郎 編著
染谷 臣道

『収奪文明から環流文明へ』

——自然と人類が共生する文明をめざして——

古川 範和

人間の成長による自然と文明の融和

本書との出会い

Barack Obama氏がアメリカ合衆国大統領として再選されたその日、この『収奪文明から環流文明へ』を編著者のお一人である伊東俊太郎先生から、先生の研究室で直接に手渡していただくという幸運に私は恵まれた。

欲望にまみれた現代文明がこのままでは立ち行かないのは誰の目にも明らかである。最悪の事態を招く前に、新たな文明への転換を提言する。

そう帯に紹介されている本書の内容は、

序章 文明と自然——「環流文明」に寄せて

伊東俊太郎

第一章 科学・技術から未来文明を考える

原田憲一、犬塚潤一郎、神出瑞穂

第二章 枯渇する資源を越えた未来文明

星野克美、金子晋右

第三章 精神文化から未来文明を考える

保坂俊司、濱田陽、染谷臣道

終章 環流文明はプレ文明のルネサンス

染谷臣道

という構成で語られている。

九人の執筆者によって議論が展開されている共著であるにもか
かわらず、その事実を特に意識させられることなく一つの流れの
中で通して読むことができた。共著であるものを恰も単独の著者
によって書かれたもののように読むことができるという経験は私
にとって初めてであった。よって、今回はそれぞれの議論を個別
に紹介させていただくよりも、本書全体を統合された一つの文章
として紹介しつつ読後の感想を述べたいと思う。

文明とは何か

これまで文明の定義についていくつかの異なる見解を耳にした
ことがあるが、本書における説明は私にとって斬新且つ最も納得
できるものであった。

「文明」という言葉は、もともと、科学技術の輝かしい成
果で開花した近代西洋が、自らの文化（広義）を褒めたたえ
るために造った造語であり、自らの文化（広義）だけを指す
固有名詞だった。やがて古代文明にも拡張され、今日では普
通名詞として使われるようになっていく（五頁）。

これによれば、文明というものは広義の意味における文化即ち
「生きるための方法」(way of life) (七頁)の近代ヨーロッパ以
降における特殊な相、つまり文化（広義）の一形態として理解で

きる。文明は、狭義の意味における文化（考え方、感じ方、観
念、思念、思いなど人間の精神活動及びそれを形成する言語など
の装置）、政治、経済、社会という四つの要素によって構成され
ており、これらはそれぞれ人体における神経系、循環器系、消化
器系、全身骨格に対応するという（九頁）。

この知見が示唆する重要な事実、それは我々の反省の目は政
治、経済、社会を超えて文化（狭義）即ち我々人類の精神作用に
まで向けられねばならないということである。だからこそ、「環
境革命」は「科学革命」を超え出る「叡智革命」という立場まで
止揚される必要があるとされる（二八頁）のであろう。この重要
な点が本書における議論の哲学的基礎を成している。

個々の科学技術的問題をたんに知識として解決するという
だけではなしに、その知識が人間や地球の生とどのような関
係をもつかの未来まで全体的に見透し、わきまえる叡智の人
へと、科学技術者は変わってゆかねばならないが、これには
たえず一般市民が参加し討論し合って率直な交流がなされね
ばならない。これを両者の間での、情報、知見、生活意識の
「環流」といつてよいだろう（同）。

一般市民が科学技術の問題に関する議論に参加するには、科学
の持つ一般的な性質について理解するところから始める必要があ

るだろう。本書ではその助けとなる議論も盛り込まれており、そこに新しい時代の建設に参加する第一歩を踏み出すために知っておきたいことが満載されている（二三―四四頁）。

文明の神経系つまり人類の精神的活動が環流的になる結果として、我々は環境破壊を生む自然的収奪及び格差社会を生む社会的収奪（二三頁）に象徴される「収奪文明」から、「文明が自然を食いつぶしてゆくのではなく、自然の中に文明が育てられ、文明の中に自然が生かされる」（二二頁）「環流文明」へと移行できる、という図式が見えてくる。

環流思想という叡智

では、「叡智」とは具体的に何を指すのだろうか。本書では「一元多現」というインディ的循環思想が紹介されている。それは仏教に典型的に見出される「縁起思想」に支えられており、一元的な価値観の持つ排他性と多面的な価値観の持つ無秩序性を乗り越えることができるパラダイムであるとされる（二二六頁）。

「循環の思想」を指す「環流文明」の基底を形成する思想には、仏教が提示した縦横無尽の対流をイメージする思想の貢献の可能性が期待される。つまり仏教の『縁起思想』のような、価値観の多重性、循環性を前提とするマンダラ的思

想が重要となる（二二九頁）。

この循環思想という叡智が得られれば、本書において批判されている「文明の高さ＝一人当たりの物質・エネルギーの消費量」という思考様式（二〇頁）なども訂正されることになる。周知のとおり、我々は物質・エネルギーを無制限に消費しつづけることはできない。資源の有限性及び人類の活動と地球資源の循環性を考慮に入れた場合、文明の高さを定量化したいならば、例えば「考察の対象となる一定の生活水準を、如何に少ない物質・エネルギーの消費で賄うことができるか」によって計測するほうが余程賢明であろう。尤も、売上よりも利潤（売上－費用）に注意するビジネスの常識から考えれば、これは当然の話であるが、何れにせよ、我々は根本的な宇宙観から再検討する必要があるとわかる。

さて、環流思想が文化（狭義）という文明の神経系を流れる時、循環器系たる政治はいかに呼吸するのだろうか。古代インドのマウリア朝（紀元前三一七年頃―同一八〇年頃）を建国したチャンドラ・グプタや、彼の孫であるアシローカ王の生涯に響く息吹に、我々はその答えを聞くことができるという（一四三頁）。示唆に富むその詳細については、是非とも直接に参照していただきたい。

環流経済

叡智革命という枠組みの中で循環思想に基づいて遂行される科学革命は、如何なる形の消化器系つまり経済を環流文明に付与するのだろうか。

本書では、「第二期科学技術文明システム」というアイデアが提唱されている。

「第二期科学技術文明」という概念はまだ確立したものであるが、これまでの文明と異なり、指数関数的な成長拡大によってカタストロフィーを起こさないように制御する文明でなければならぬ。生きている人間と同様に、社会に科学技術成果である人工物を薬のように慎重に導入すると同時に、継続的にその功罪をウォッチしながら制御する「文明の制御」がキーワードである（八〇頁）。

「文明の制御」の対象となるのは、

- ① 地球の資本金である化石燃料や資源の野放図な使用と地球の環境容量への影響
- ② 科学技術が生み出す人工物の社会への無制限の投入
- ③ 極端な市場経済と競争による変化のスピード
- ④ 国内、国際間の富と科学技術の所産の不平等
- ⑤ 以上の総合として成長拡大した文明の根本原因になった

人間のふくれ上がる欲求

であるという。このモデルの中で、経済（消化器系）が政治（循環器系）、社会（全身骨格）そして狭義の文化（神経系）と連動して機能するように設計されている事実は極めて注目値する。というのも、応用経済学の各分野で扱われている諸領域が、このモデルには全て集約されているからである。

「まだ確立したのではない」システムであるものの、イギリスの経済学者J・S・ミルの『経済学原理』の中にその思想的背景を持つという（八二頁）この第二期科学技術文明は、特徴的な三つの機能を備えているという。

- ① 生体における自律神経系のような文明の「動的恒常性維持システム」
- ② 動的恒常性維持を可能にする「文明の計測制御システム」
- ③ 地球規模の超複雑系に成長してしまつた現在の文明システムを計測制御が可能で、安定した生存志向の「自律分散協調型文明システム」化

「文明の制御」を可能にするためには、高度な情報システムが必要である。それが実際に構築、運営されれば、現在我々が証券や穀物などの価格といった金融市場の動向をモニターで把握する

ような形で、地球システムに関する情報を共有することができるようになるかもしれない。

また、各地域に環境都市を建設するにはそれぞれの気候風土に応じた社会インフラが必要である（七九頁）。これを実現するには多大な労力が必要となるだろうから、世界中が失業問題を抱えている現在、この新しい科学技術文明システムの構築はケインジアン的な経済対策としての機能も果たし得るだろう。

環流社会

それでは、環流文明の全身骨格、社会は如何なる様相を呈するのだろうか。

環流文明の社会では、所有権——更にはそれを支えている占有原理——が見直されるといふ。

人間は一人で生きることではできず、人間だけで生きることできない。自然のなかで、あるいは大都会であっても地球上で生きているのであり、その前提に立った上での自律権であり、所有権であるべきなのだ（一五六頁）。

そこで我々は「人間と自然にへ未知なるもの」の領域を含めた分かち合いと共有の関係を考えることが重要である（二五五頁）といふのだが、本書の文脈においてはこのへ未知なる

ものへの存在を認めるといふことを、叡智即ち環流思想を理解し実践することであると解することができる。

人間と自然に加え、へ未知なるものへの領域を謙虚に受け入れるならば、占有ではなく共有を基礎とした「共有権」が基軸となる文明世界を描くことができる。ここに名づける共有権とは、自然資源などのある対象を使用し、収益を上げ、処分する行為にあらかじめ一定の制限を設ける、つまり、その対象に自分以外の他者の権利が及ぶ可能性を認める権利のあり方をいう。他者を包括する余地をもつという意味で、この共有権は包容的権利ともとらえることができよう（二五六頁）。

共有権が適応される範囲は、

- I 物質の基本に関わる知識・技術・産業
（例）分子等を扱う原子力分野等
- II 生物の基本に関わる知識・技術・産業
（例）DNA等を扱うバイオテクノロジー、再生医療等
- III 人間生活の基本に関わるもの
であるといふ。

共有原理に支えられる社会を実現するには、「多くの人々の幸福や環境の保全を願う、柔軟で広いこころの涵養」（二六五頁）が

必要である。そこで本書では、フレンドシップやスポーツマンシップのような意味合いで「コモンシップ」(commonship)という新語を提起している。

この精神は分け合う (share) に加え、もっているものを合わせることを含めるところに、大きな特徴がある(同)。

我々は他者と意識的に物事をシェアするのみならず、自己の「所有物」でさえ実際には他者と共有している、という認識のもとで生活することになる。まさに叡智があつてこそ実現し得る社会ではないだろうか。

環流文明が登場しなければどうなるか

以上のような神経系、循環器系、消化器系、全身骨格を備える環流文明。このようなグラントデザインがプレゼンテーションされる場合、その実現の鍵となるのは、学者のみならず、今後のビジネス・リーダー達が現代文明の齎す危機について如何に高い「臨場感」を持てるかどうかであろう。危機意識を持つことの重要性はよく耳にするが、実際に人間が動くようになるためにはそれのみでは未だ不十分であり、危機感、つまり無意識レベルにおける危機の認識までもが必要とされると私は考える。言い換えれば、変革の必要は頭で理解されるのみならず、肌で感じられねば

ならないだろう。

本書では、シュメール文明以来、多くの文明が人間の営為による環境破壊で滅亡してきたことが語られている(二二三頁)が、歴史に基づく映画やアトラクションの製作によって、そうした情報を広く我々の五感を通じて拡散し、諸文明の滅亡を追体験できるようにすれば、人類の危機に対する臨場感は環流文明の構築に着手するところまで高まるのではないだろうか。これもまた大きなビジネス・チャンスとなり得ることは言うまでもない。

そこまで考えさせられる論述が本書にはある。環境破壊や資源の枯渇に関して、例えば巷では石油の欠乏についてはしばしば議論される。確かに二〇一一年には、米国ノース・ダコタ州からカナダのサカチュワン州にまで広がる広大な油田が開発されている事実が報道され、「石油業界では過去四〇年間で最大の発見」などとも囁かれた。しかし、仮に石油の需給が逼迫しなくとも、それで環境資源の問題が解決する訳ではない。

金属資源、淡水資源、食料、木材等、多くの諸資源の需給が二〇二〇年代の前後に逼迫し、価格が高騰する。その理由は、世界的な人口増加、BRICs等新興工業国の経済成長、気候変動、持続不可能な開発による環境劣化等である。つまり二〇二〇年代の前後に、複合的な環境危機が発生する

(一一二頁)。

エネルギー危機が到来したとき、我々は、言わば「ハイパー・スタグフレーション」とでも呼ぶべき状態へ突入するだろう。価格が高騰するのは必定であり、エネルギー資源が無くなる当然の結果として経済成長も滞るからである。失業率が急上昇するだけでなく、市場からモノが消えるのだ。

因果の連鎖はここで止まらない。

エネルギー需給が逼迫した時、いったいどのような事態が発生するのか。それは、大規模戦争である(一一六頁)。

文明と自然

従来の文明論や人類学の研究成果において、文明の構造は中核構造(自然観、精神文化)と外殻構造(法制、経済、技術)によって構成されているという(一〇三頁)。言うまでもなく、これらは本書の冒頭で紹介されている文明構造に置き換えることができ(中核構造Ⅱ神経系、外殻構造Ⅱ循環器系、消化器系、全身骨格)。我々は既に、環流文明の神経系について触れた際、今後の文明は自然から搾取するのではなく、自然の中で育まれる文明へと変わる必要があることを確認したが、同じことが別の言葉で次のように語られている。

まず、文明の根源を決定する「中核構造」については、自然よりも人間を上位に位置づけ、人間の物的な欲望を充足するために、自然から資源を取り尽くし自然を破壊するようなこれまでの「人間中心主義」の自然観では、人類そのものもはや生存できなくなるという事態が到来すれば、それとは正反対に、自然を至高のものとして重視し、自然そのものから与えられる資源や生態系を貴重な存在として尊重し、それらを保全しながら許される範囲で人間のために利用するという、「自然中心主義」の自然観が拡がらざるをえなくなるだろう(同)。

自然中心主義が決して奇抜な精神文化でない例として、工業化以前の日本における農耕文明の中核構造が挙げられている(二〇八頁)。それが端的に表れているものの一つが、有名な童謡『夕焼け小焼け』であるという。その一節に対して独自の「文明論的な解釈」が試みられているが、これが非常に味わい深いので、是非とも参照していただきたい。

近代ヨーロッパの科学革命を経て文明という衣を纏った人類の文化は、人間の成長過程における反抗期と呼応する。自らを生み育てた基盤から自己を乖離させる、という点においてである。私はある機会に、「人間とは、成長を続けた先において、自分の親

の親になるべきものである」と孝行について教わったことがあるが、人類は自然界における他のメンバー達の親になるべき時代を迎えているのかもしれない。

先日あるテレビ番組で紹介されていたが、フィリピンのある島では、人間がウミガメを積極的に保護している。ウミガメの母親が卵を砂浜に埋めて去った後、人々がそれを掘り起こして持ち帰り、安全な場所で孵化させる。そうしなければ、卵は野犬に掘り起こされて食べられてしまう上に、運よく誕生したのも砂浜から海水に辿り着く間に鳥によって狩られてしまう。

人の手によって保護されて生まれた亀たちは、再び海辺に運ばれて海水へ放されるのであるが、ここまで無事に過ごしてきた子供の亀たちが大人になるまで生存できる確率は僅か1%であるというのであるから、彼らが絶滅の危機に瀕しているのも不思議ではない。

旧約聖書における「人間が自然界を支配する」という世界観が、時に批判される。その場合、経済的欲望に突き動かされた人間による支配が思い浮かばれているのだろう。しかし右に見たように、複雑性に支配される過酷な自然環境に対し、人間が智慧を働かせて積極的に種の保存に介入して地球の持つ多様性を維持し発展させるよう努めることを「人間による自然界の支配」と定義

するならば、人類文化の巨大な礎の一つに刻まれているこの命題も、決して非難されるべきものではないのではないか。私はそう解釈したい。

言語習得と人間の成長

最後に、人間が更に成長していく過程に関する、示唆に富んだ話題に触れておきたい。本書の終わりに、言語文化と文明の関係が語られており、欧米語と日本語の間の相違が参考にされている。ここで取り上げられている既存の学説によれば、欧米語が自己を含めた物事全体を客観的・理性的に分析して見る文化を基礎に構築されているのに対し、日本語の基底を成す文化は、自己の目線から主観的に周囲を観察する他者依存的なものであるという。興味深いことに、これらは上の「一元多現」に関する議論の紹介で触れた、排他性を孕む一元的な物の見方と無秩序性を孕む多元的な物の見方に、それぞれ対応することがわかる。

この事実は重要な意味を持つ。我々は欧米語と日本語の両方を深く（ネイティブのように）習得する過程で、一元的な思考と多元的な思考の両方を獲得できるということである。それによって、固定的な視点や他者依存的な視点の何れかを状況に応じて（もしくは両方同時に）自由に使いこなせる一元多現的な思考が

可能となる。環流文明の神経系の設計に大いに貢献するだろう。

また、このようなスキルを身に着ければ、何れの言語を用いる場合においてもこれら二つの思考様式を使い分けてハイブリッドなコミュニケーションをとることが可能となるだろう。本書で取り上げられている川端康成の『雪国』の冒頭及びその翻訳を例に考えてみよう。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という日本語の文は、

The train comes out of the long tunnel into the snow country

と翻訳されたが、前者（日本語）が汽車の乗客による主観的な体験を想起させるのに対し、後者（英訳）は列車がトンネルを抜けて雪国に入る様を俯瞰的に描写している。訳者は、原文の表す抽象的な事実を欧米語と親和的な思考で再構築し、英訳してしまったのである。しかし、右のハイブリッド型思考様式を備えていれば、欧米語を母語とする読者であっても著者によって日本語の原文に込められた情景を見ることができ、それを直接英語で表現することができる。例えばこの場合、原文によって表されている情景を、主語がないという特性とその語順を保持しつつ、

When past a long tunnel piercing the boarder was there a snowy country

などのように言うことができよう。

本書全体を通じて学んだこと

こうして内容を拝見していくと、本書において述べられていることはビジョンとしてかなり具体的且つ現実的であり、現代文明に対する非難ではなく、反省であることがわかる。拝読して痛い痛感したことであるが、環境問題に対する提言というのは、このように建設的なものでなければならぬだろう。将来に対する展望を生かすのは実現可能性であるが、本書にそれが与えられている最大の理由は、議論の根底を為す哲学が自然と文明の対立の止揚であって、単なる現代文明の否定でないということではないだろうか。

今日、自然と文明の関係を問うことは、もちろん環境問題に起因している。そしてそう問う際には、環境問題がその実、『環境』の問題ではなくて、「人間のあり方」による問題であることに、深く注意を向けることが必要だろう。地球全体を覆うまでに発達したといわれる現代文明に対して、およそすべての人が何らかの批判の目を向けていると思われるが、その内容や程度にはかなりの違いがあるのが現実だ。実際、どう問題に対処するかという具体的な意思決定場面で

は、食い違いや対立ばかりでなかなか前に進まないという事態がしばしばである。

さまざまな現象観察・研究から伝えられる環境危機は深刻で、対策は急を要している。どう対処するかという方法の問題を加速するためには、問題の本質を明らかに共有する必要があると考えられる。つまり、「如何に」を問う前に「何・なぜ」を問う必要があるということだ（四五頁）。

本書の議論は、そのタイトルがテーマを簡潔明瞭に示しているのとは対照的に、想像を遥かに上回るほど広大且つ深遠である。それは既に述べたとおり、本書において「文明」というものが「文化」つまり「生きるための方法」という抽象度まで高められた上で扱われているからであろう。この包括性こそが、本書において社会システムの形式的変化以前に人間の生き方そのものが問題とされており、その議論が極めて広汎にわたりつつも見事に調和したストーリーとなっている所以であろう。

最後に、本書を拝読する機会を提供して下さった伊東俊太郎先生、そして今回の図書紹介を執筆するよう勧めて下さった立木教夫・道徳科学研究センター長に、衷心より御礼を申し上げます。

収奪文明から環流文明へ。多岐にわたる分野の異なる視点から

一つのテーマを鮮やかに描き出すこの名著は、読者の前に一元多現の姿を見せるだろう。

（平成二十五年元旦）